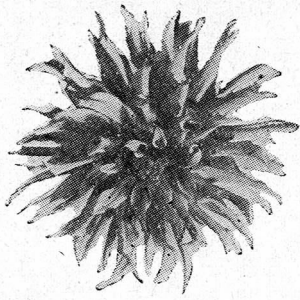


ダーリアの栽培について

原 秀 雄

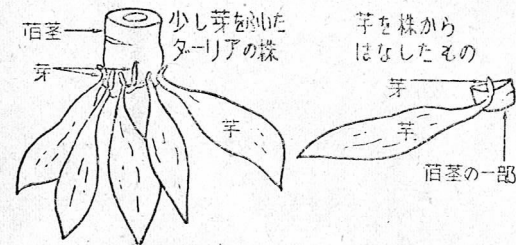


新花コロナ 巨大輪 (朱赤)

ダーリアの来歴については、世界各国に面白い記録があるが、限られた紙面なので暫く置いて、今回はその栽培について述べてみたいと思う。花卉の種類はその数幾千に達するであろう。そして菊、バラ、カーネーション、グラジオラス、水仙、チューリップなどよく作られ、各地にあまねく見ることのできるものも多いが、ダーリアのごとく世界に行きわたっているものは極めて少く、その点では他の何物もこれに及ぶものはない。その原因はおそらく①栽培の容易なこと、②花の形状・色彩などが多様であること、③開花期が長くかつ花着きの良いこと、④花の用途の広いことなどが主なものと言えるであろう。

栽培法

繁殖法 ダーリアの繁殖法には分根(株分)、挿木、実生などがある。普通ダーリアの栽培は分根からその第一歩が始まる。秋の末から春まで貯蔵してあつた株を取出して鉢、小刀またはこれに専用の分割刀を用いて株分するのである。植物によつて根から芽をふいて立派に生長するものもあり、この性質を利用して根挿しを行われる場合もあるが、ダーリアの根(塊根であるが、芋、球根などもよばれる)には発芽の機能がなく、芽は根の上に続く前年にできた茎の基部にある。それで株分をするときには、この茎の部分を縦に裂くようにして、芋一つ一つに芽のある古い茎の基部をつける必要がある。株が多いときには分根にも長時日を要するので冬の中から順次行う必要があるが、十株や二十株の場合には春四月中下旬頃木箱に湿らせた鋸屑(固木のもがよい)を入れ、ダーリアの株をその中に伏込み暖い所におくと数日にして芽を出してくるから、あまり芽の伸びぬうちに分根を行うのである。このように芽が催してから分根を行うと、芽なしのものを作る恐れが



第一図 ダーリアの株と切離した芋

ない。一株に芋が多数ついているものではない。ときに根毎に旧茎の一部をつけることのできる場合もあり、その場合無駄になる芋の出ることもあるが、これは止むを得ない。また一つの芋に二つ以上の芽のある場合、芋を縦に二つ割にして切口に灰をぬり植付けられることもある。分根後植付までに期間のあるときには、芋や芽を乾かさぬように湿つた鋸屑の中または土中に浅く芽を上にして伏込み、随時そこから取出して植付けるとよい。

一つの芋から多数の苗を作る場合には挿木を行うがよく、また品種を育成する場合は、あるいはミグノン、コルトネス、アンウィンズなどという部類のもの

のよい。ダーリアの植付けに当り先ず行わねばならぬことは、植付ける場所の整地である。ダーリアの細根は下にも横にも相当長く伸び先端近くから土中の養分を吸収するものであるから、相当に広くかつ深く耕し土塊を碎いて軟かくしておく必要がある。これは庭の一部に植付けるにしても花壇または畝に植付けるにしても同様である。耕す深さはおよそ一尺くらい必要で、庭の一部などに植付ける場合あまり広く耕すことはできぬが、一株に直径二尺くらいの場所を耕す必要がある。夏あまり乾きすぎると所では畝などでも一株毎にこのような耕し

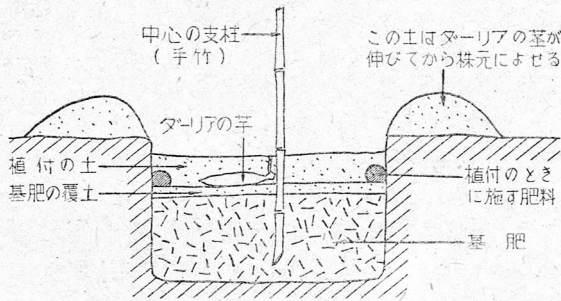
育苗に実生が行われる。種実を蒔く場合少量ならば鉢蒔、箱蒔とし、多量の場合にはフレームなどに蒔付ける。蒔付及び管理の方法は他の草花などと大差はない。挿木、実生などに関しては他日を期したい。(第一図参照)

植付け ダーリアはあまり土質を選ばないが、最も適した土質は排水のよい、やや砂質の壤土である。粘土質の土壌では茎葉は伸びるが花が少く花首の弱い傾があり、砂礫質にすぎると茎葉の生育不良となり花梗が短く花が小さくなり草丈が揃い難い。夏乾きすぎても湿りすぎても共に害があり、大雨のあと一、二日も水が引かないときなどは根腐れを起してそのまま枯死することがある。菊などでも根がよく張つていれば、このような場合枯れることがほとんどないが、この点ダーリアは極めて弱い。またダーリアは寒さに弱い、暑すぎても正常な生育を期し難い。

方をする場合もあるが、根の伸びる地積を制限される結果、株はあまり大きくならぬ。

ダーリアは株張りの大小により予め栽培距離をきめる必要もあるが、普通三尺乃至五尺四方に一株の割合で植付ける。この距離で直径一尺五寸乃至二尺、深さ一尺ぐらいの植孔を作り、これに予め基肥を施す。

基肥も土質により多少の差はあるが、普通熟した堆肥(乾地では牛尿を湿地では馬尿を主としたものがよい)を坪一貫前後、魚肥その他骨粉、油粕、糠など適宜に混じて、下から上昇する水分を堆肥の層で遮らぬように踏み固め、これに腐熟した下肥を一、二升ぐらい注ぎ、土を一、二寸覆う。これを植付の少くとも七、十日前に完了する必要がある。草木灰は植付のときに施すのがよく、基肥の中に入れると流失や窒素分の損失を来す恐れがある。また窒素肥料の過多にならぬよう注意して施肥する。株の小さい品種例えは前記のミダノンなどを植付ける場合、畝では植孔でなく植溝を作り、それに基肥を施し、株間一、二尺に植付ける。これら矮性の品種は芋でも繁殖し得るが、種実がよくでき、これを四月に鉢



第二図 ダーリアの植付模式図

や箱に蒔き、一回鉢や床に仮植し、六月上旬頃に定植する。

植付は札幌附近で五月中旬から六月上旬頃までの間に行うが、あまり晚いよりは晩霜の恐れのない限り早い方がよく、ある程度早い方が花は多く咲くことになる。また鉢植にしてフレームあるいは日中は日当りのよい所に、夜は屋内に入れて育て、晩霜

がなくなつてから定植するのも一法である。植付けるには植孔の中央に芽を置くようにして芋を横たえ、植孔の一、二カ所に草木灰を置き、また他の個所に菊栽培に用いる乾燥肥料または市販の配合肥料のようなものを土をかける。また芋や芽は肥料に直接ふれさせないように注意する。芋の上には土を一、二寸ぐらいかける。植付けた地表は初めはむしる全体の地表より低くなるようにし、茎が勢よく伸びだしてから株元に土をかける。またダーリアは強い風に倒れ易いから、植付けのときに芽のそばに一本と植孔の周囲に三四本の丈夫な手竹を立て、目の高さぐらいの所でよせてしばつておくことが必要である。この周囲に立てる手竹は茎が伸びてからでもよいが、中心の一本だけは植付と同時に土をかける前に立てる。始めは中心の竹に茎を結びつけておき、枝が張るように

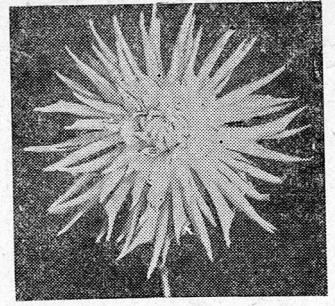
なつてから実子繩のようなものを周囲の竹に二、三段に張りめぐらせるようにする。(第二図参照)

追肥 ダーリアは芋に養分を貯え、植孔にも多量の基肥を施してあるが、秋晩くまで花を咲きつづかせるにはやはり追肥の必要がある。これは葉の色、花の咲き具合などを見て肥料が多少とも不足していると思えるときに施すのがよく、時期は大休八月上旬中旬頃と思えばよい。そして濃いものを二時に施すより、薄いものを数回に与えた方がよく、肥料としては魚肥及び油粕を各別に容積で一に対し水五ぐらいの割合に加えたものを日蔭に用意した樽、瓶などにに入れて蓋を施して腐らせたものの上浄および下肥の熟したものを用意しておき、おのおのを混ぜたものを水で三、四倍に薄め、株の周囲に浅い溝または孔を作つて一株三、四合ぐらいずつ施して覆土する。これを五、七日おきに三、四回、時にはさらに幾回か施す。ただ下肥を多くすると葉は太るが花に力がなく、また魚粕には磷酸分が多いため花がよくなるなどのことがあるから、肥料の使い分けをいろいろにかえてみることも必要である。また追肥は細根の走っているところにあまり遠からず近からず施すことが必要で、周囲の手竹の外側ぐらいのところに施すようにする。



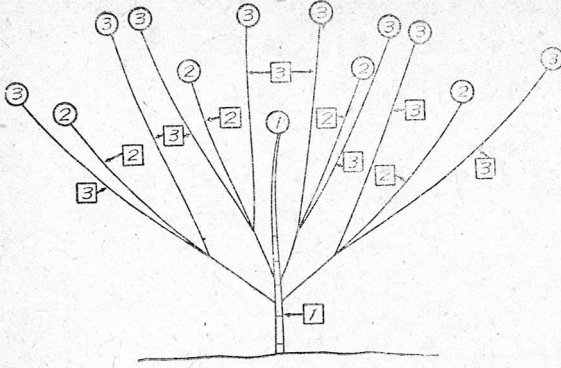
王殿超巨大輪(緋紅)

葉腋から枝が伸びてくる。中小輪のダーリア、または大輪のものでも花の大きさに重きをおかぬ場合ならば、弱い枝や懐枝など他の障りとなるような枝を取除くだけで十分であるが、大輪の品種を十分の大きさに咲かせるには整枝に心を用いる必要がある。また、あまり丈の高くなる品種も野放しにはできない。植物はいずれも同じであるが、普通の場合、茎枝の先端の芽ほど勢が強く、基部のものほど弱いのが常である。ダーリアの場合、勢がよいからといって茎の上部の芽から出た枝を残すと、丈が高くなり、支柱の施しよりもなくなるから、茎の中部の枝、それも実用に供し得る限り下の枝を四、五本立て、他の枝は小さいうちにとり除く。茎の頂の初蕾の直下に、さらに一または二個の蕾を生ずるが、下の蕾は初蕾に故障のないかぎり小さいうちにかき取る。五月末から六月初めに植付けたものならば、おおむね七月中旬から八月上旬には花を開く。東京地方のごとく八月にダーリアの茎の切返しを行つて九月に咲く秋花に期待をかける必要のあるほど夏の暑くない



王冠 超巨大輪 (鮮黄)

北海道においても七、八月にはあまりよい花を見得ぬが、初蕾を色よく咲かせるためには花の数は少くなるが晩く植付けをなし九月涼しくなつてから花を咲かせるようにするのがよい。大輪のダリアでは、普通枝の頂に葉に包まれた蕾を見てからおよそ



第三のダリアの整枝式

- ① 主枝
- ② 一番枝
- ③ 二番枝

花の蕾の初蕾
花の蕾の二番蕾
花の蕾の三番蕾

三十日くらいで開花する。つぎに枝(一番枝)も本幹と同じになるべく下の節から、二番枝二本を立てて他の芽をかきとる。枝の最下の節からは枝出にくいから、第二または第三節から二番枝を出すことになる。枝の蕾も初蕾と同じ出方をするから、同様脇蕾はかきとる。早植をしたものでは少し涼しくなつてから開くので、二番蕾の方が初蕾より大きく立派な花を開くことが多し。花の大きさは二番より三番、さらに四番と小さくなるのはやむを得ない。(第三図参照)

根株の冬囲 秋の長い年でも札幌附近で十月の下旬、早ければ中頃には強い霜がある。この霜でダリアは葉も花も茹でたように洞んでしまうから、なるべく晴れた日に株を掘上げるが、あらかじめ茎は下部二、三寸を残して切り去り、品種の名札を株毎につけて丁寧に掘り上げ、土を落し芋の表面の乾く程度に軽く干して、すぐ木箱に入れ、鋸屑をすき間に十分詰め、蓋をなし、新聞紙を敷重ねてよく包み、冬季節凍らぬ、また温度の急変せぬ場所に置いて冬を越させる。茶の間の押入、二階など適所の一つであるが、冬中十分の注意を必要とする。気早に芋を株から切離して貯える人があ

るが、ふなれな人は芽なしの芋を作るばかりである。温度が高すぎると芋が消耗を起し、また掘上後、芋をあまり干しすぎると冬の中に乾きすぎ、共に芋に皺がより、貯蔵中枯

れることがある。また地下水の低い雪の多い所では、土を四尺くらい掘り、穴の底に枕木をおいて、この上に株を鋸屑で箱詰したものを置き、周囲に干草を詰め、さらに土を盛上げ、板や藁などを上に覆い、雪の積るにまかせる。地下水の高いところでは穴を掘らずに地表面または少し盛土した上に同じようにして土を盛ればよいが、これは盛土がなかなか大仕掛になる。いずれも三月中旬には雪とけ水に濡されぬよう掘り出して箱のまま屋内の凍らぬところに入れて、この方法で越冬したものは芋が充実し、したがって芽立ちもよい。いずれにしても撰氏三〜五度くらいの温度に保つのが理想のようである。

特に白・黄などの花を好むようである。D T、B H Cの撒布は著効があり、また捕殺する。ことに早朝は動作が鈍い。ヨトウムシは土中で越冬した大形の幼虫がダリアの新芽を地際から喰倒し、また初夏と初秋とに発生した幼虫は葉を喰害する。砒酸鉛の撒布D T、B H Cの撒布など有効である。また地際から喰倒された新芽に近い土を早朝掘返すと土中にひそむ幼虫を捕えることができる。

病蟲害 現在最もダリア作りがなやまされている病害はバイラス病であろう。また害虫にはコガネムシ、ヨトウムシ、ズイムシ、アブラムシなどがある。

パイラス病に犯されたものは、茎葉の発育、花の形、色が悪くなる。葉には淡色の斑が入り、形が歪み、花に斑の入ることもあり、芋には赤い条斑の入ることがある。これはとり去り焼捨てる。この病害は自然的にはアブラムシによつて伝染するので、先ずアブラムシの防除が必要である。また人為的には分根に用いる器具、切花や整枝に用いる鋏、その他病株の汁液の着いたあらゆる物により伝染するから不断細心の注意が必要である。品種により抵抗力が強いものはもちろんある。

コガネムシ にはいろいろの種類があり、成虫が葉も食うが、主に花に喰入る。

ズイムシは茎の中に喰入り、遂に茎が折れなどする。孵化当初は主に新芽や蕾に集り被害部は黒変する。茎に喰入つたものは虫尿を目当てに茎を割り捕殺する、B H Cの撒布は有効である。

アブラムシは群がり寄生して植物の茎葉などから養分を吸収するのみならず、前に記したバイラス病の伝染を援ける害虫であるから、防除は十分に行わねばならぬ。枝をすかして通気を良くし、B H C、各種のニコチン剤、除虫菊剤、デリス剤などの撒布はもとより有効であるが、中でも近來できたホリドールの撒布は非常に有効である。ただこの薬は人体にも有毒であるから、取扱上細心の注意が必要である。

(筆者は北海道大農理學部・文部教官)

